

阪田知樹

ピアノリサイタル
シリーズ（全3回）



©Ayustet

シリーズテーマ

ショパンを巡って 阪田知樹がいざなう ピアノ音楽の軌跡

第2回 踊りから花開くピアノ音楽の世界

バッハ：パルティータ第4番 / シューマン：蝶々 / シュミット：ワルツ・ノクターン第1番
ラヴェル：高雅で感傷的なワルツ / ショパン：マズルカより、バラード第4番

'22/ **12/16** (金) 19:00 兵庫県立芸術文化センター小ホール

18:45 からプレトークを行います（開場 18:15）

4000円 / 大阪新音会員 3600円（全席座席指定）

お申込み
お問合せ **大阪新音・神戸新音**（共催） 大阪市北区西天満 4-6-14 イーデザインビル201 ☎ **06-6926-4888**

●チケットは次でも取り扱っています…… 芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255（月曜休館）／電子チケットぴあ
<https://t.pia.jp>（Pコード 219-953）／ローソンチケット <https://l-tike.com>（Lコード 54009）／e+ <https://eplus.jp/>

大阪新音がピアニスト 阪田知樹さんと話し合つて昨年（2021年）から始めた阪田知樹ピアノリサイタルシリーズ「シヨパンを巡つて―阪田知樹がいざなうピアノ音楽の軌跡（全3回）。ピアノ音楽の可能性を飛躍させたシヨパン（1810〜49）」と、その作品を軸に、シヨパンが過去や同時代の作曲家たちとどういう関連性をもつて作曲活動を行ったのか、そして後世の作曲家らにどういう影響を与えたかをたどるのが狙いです。昨12月開催の第1回の「幻想（ファンタジー）」に続く第2回では、常に音楽に密接な関わりを持ち続けている舞曲に着目します。

「祖国愛」たぎるシヨパンの舞曲

第2回の構成・演奏曲は―

阪田さんに聞きました

シリーズのテーマ、「シヨパンを巡つて……」について、もう一度うかがいます。

「私は、シヨパンの音楽から意図的に遠ざかっていた時期がありました。余りにも身近にあったので、何か大切なものを見失っているように思い、少し距離を置くことにしたのです。ところがしばらくして、練習の合間に、楽譜棚に並んでいるシヨパンの楽譜に目がとまり、何気なく引っ張り出すと、そこには無限の世界が詰まっていることを発見しました。『これほど色彩に満ちた美しい音楽を前にし、これらを弾かすに思われるだろうか！』と、心からそう思った私は、あらためて彼の作品に取り組み、今の自分が信じるシヨパンを演奏していこうと決めました」

「シヨパンがバッハやモーツァルトを崇拝していたことはよく知られています。そのほかの作曲家から受けた影響、逆にシヨパンが影響を与えた後の作曲家については、あまり知られていないように思います。そこで今回のリサイタルシリーズでは、シヨパンのピアノ曲を、ただ聴くということではなく、ピアノ音楽の歴史の中で、シヨパンという作曲家がどのような存在だったのか、他の作曲家らによる作品も交えて、聴き手の皆さまに体験していただいてはどうだろうか考えたのです」

「ポーランド人」に誇り

第2回では「踊りから花開く。ピアノ音楽の世界」が探求されます。「こんどは、シヨパン作品の中でも重要な位置を占める舞曲作品と、その要素を含んだ作品を中心にプログラミングし、音楽の歴史をたどってみようと考えました」

「シヨパンはポロネーズ、マズル

カ、ワルツなど、舞踊をもとにした楽曲を多く残しています。中でもポロネーズとマズルカは、どちらもポーランドの代表的な民族舞曲で、シヨパンが生涯にわたって書き綴った作品です。当時、ポーランドという国が難しい状況*にあった中、ポーランド人であることに誇りを持っていたシヨパンは、音楽の中で愛国心を謳い、自国を讃えていたと思います」

よく知られているメヌエット、サラバンド、ワルツなどの楽曲も、もとは舞曲です。

「サラバンドは16世紀はじめにスペインで流行した舞曲ですが、フランスやイギリスの宮廷に伝わり、ヨーロッパ中に広がりました。シヨパンが崇拝していたバッハも、サラバンドを自作に使っています。メヌエットはフランス起源で、17世紀後半から18世紀にかけて大流行したらしい。たいへん優雅です。これらは、

後の時代に書かれたソナタや組曲の中に息づいています」

隠れた名曲も演奏

第2回の演奏曲は、そうした背景を踏まえ、秀逸の作品で構成される訳ですね。

「シューマンは、シヨパンと同じ1810年生まれの作曲家（1856で、『蝶々』はドイツの作家ジャン・パウルの『生意気盛りの』という小説の中の舞踏会場面を、個性的なワルツで描いた作品です。ワルツが人気を勝ち得たのは、他の舞曲に比べて少し後の時代になってからです。しかし、その人気は絶大で、ワルツという名のもと、数えきれないほどの名曲が作曲されました」

『高雅で感傷的なワルツ』は、シユーベルトの影響を受けたラヴェル

……………

***ポーランド** ヨーロッパの中でも古くからある王国でしたが、17世紀以降、隣接するプロイセン（現在のドイツ北部）、ロシア、オーストリア（ハプスブルク家の干渉を受けます。そして18世紀末までにこの3国に分割・領有され、国は消滅します。シヨパンが生きたのは、まさに他国の支配を受けていた時代です。

ポーランドが実質的な独立を回復したのは20世紀の第1次世界大戦後です。しかし第2次大戦が始まるとドイツとソ連から侵攻され、再び分割支配されます。

TV出演 引っぱりだこ続く

阪田知樹さんのテレビ出演が続いています。ABCテレビ「題名のない音楽会」には、もはや常連といえるほどの出演で、最近では6月25日、7月2日の放送両日、スーパーテクニクを披露しています。



NHKB「クラシック倶楽部」では6月に東京で開催された演奏会が8月11日に放送されました【写真上：テレビ画面から】。

これに先立つ6月には、ヴァイオリンの辻彩奈とのデュオが再放送されています。

（1875〜1937）による、官能的ともいえる美をたたえた曲です。また、フローラン・シュミット（1870〜1958）はラヴェルと同じフォーリの弟子で、ラヴェルと同時代を生きた作曲家です。官能的高揚感と熱気ある作品で名を馳せました。その名も作品も、忘れ去られようとしていましたが、近年再評価されています。『ワルツ・ノクターン第1番』は隠れた名作です。ラヴェルと併せてお楽しみください」

（記事 大阪新音）

©DEKI NAMAI

■ 阪田 知樹（さかた・ともき）

2021年、世界3大音楽コンクールの一つ、エリザベート王妃国際音楽コンクール（ベルギー）ピアノ部門で第4位に入賞、「多彩な音色をもつ、知性派ヴィルトゥーゾ」と称えられました。

2016年、フランツ・リスト国際ピアノコンクール（ハンガリー）で第1位、併せて6つの特別賞を受賞しました。「天使が弾いているようだ」と審査員満場一致による圧倒的優勝で、コンクール史上、アジア人男性ピアニストとして初めての快挙でした、

2013年、第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール（米国）では弱冠19歳で最年少入賞。「清澄なタッチ、優美な語り口の完全無欠な演奏」と注目を浴びました。

1993 年名古屋生まれ。東京芸術大学附属音楽高等学校、東京芸大を経てハノーファー音楽演劇大学（独）に特別入学し、学士・修士号ともに最優秀の成績で取得しています。現在も同大学のソリスト課程ピアノ科に在籍しています。

全国から集まる熱い声援

(順不同)

●大阪府吹田市 Nさん

阪田知樹は現代の最高のピアニストの人だ！なんと言ってもリスト国際ピアノコンクールで優勝した、ただ一人の日本人なんだから。その演奏を間近に聴いた人は皆驚いた事だろう。例えばリストのリゴレットパラフレーズ。打鍵は確実にコントロールが効いている。緩急自在が心を打つ。パッセージは真珠の様に粒だつて光り輝いている。曲想はまるでオリジナルの様に訴えかける等々。

阪田知樹は正にリストの直系だ。曲の深々とした解釈ときらめく技巧は申し分ない。今度はどうな演奏を聴かせてくれるのか、大きな楽しみだ。鍵盤のダイナミズムに乾杯！

●神奈川県川崎市 Nさん

兵庫県立芸術文化センター小ホールはこのシリーズ第1回の時に初めて伺いましたが、響きが素晴らしくて、私の中ではこれまで一番のホールでした。阪田さんの素晴らしい演奏と相まって、感動で初めて体が震えました。このホールであと2回、阪田さんの演奏を聴けることが本当に楽しみです。

阪田さんの魅力——阪田さんの音楽に出会うまでクラシックに無関心だった私を、一瞬で惹きつけ、兵庫まで来させてしまう魅力があります。感情が乏しい私の心を揺さぶるものがあり、毎回色んな感情が溢れ出します。また、阪田さんは演奏中含め、舞台上での姿

勢が美しいです。個人的なポイントは演奏中の左足です。

●東京都世田谷区 Wさん

数々のコンクールで優秀な成績を残し、テレビやラジオでも活躍され、超絶技巧と抒情的な演奏で知られている阪田知樹さんですが、演奏会のプログラムがとても考え抜かれているところも魅力です。今回は踊りにまつわるプログラムですが、一般には知られていない曲も含まれているので、それを聴くのもとても楽しみです。

阪田さんの中には弾きたい曲が無限にあるようで、同じ曲をあまり繰り返し演奏されないの、1回でも演奏会を逃すと後からとても悔やむことになっています。今回の公演も東京から伺いたいと思っています。

●神奈川県川崎市 Sさん

「阪田知樹さんの演奏を聴くと、それがどんな曲であつても誰もが笑顔になる」。阪田さんの魅力をひと言で表すと、こうなります。人間技とは思えない激しい打鍵、ホールのすみずみまで響く天上の音色。阪田さんの演奏を通して、その曲の魅力が余すところなく伝わり、なんてすばらしい音楽なの！と共感して笑ってしまうのです。

作曲、編曲、指揮もなされるマルチの才能のピアニストは、楽曲を徹底的に研究し咀嚼して、私たちに聴かせます。ステージでのトー

シリーズ 第3回 《連作集—新たな世界》

(2023年秋～冬 予定)

第3回は、バロック時代の組曲にルーツを持ちつつも、感情の振れ幅の大きさ、詩的な表現など、音楽として大きな革新を遂げたロマン派の「連作集」を取り上げます。

〈予定曲〉 ショパン：24の前奏曲

シューマン：クライスレリアーナ

ほか

ク(時間オーバーすること)は、早口で情報量たっぷり。Mitsuruやインスタグラムでは世界の阪田さんから秒でいただく(いいね！)にみんな大喜び。お人柄も舞台上の所作も超一流の阪田知樹さん。ハードルを上げ続けながら素晴らしい音楽を伝える阪田さんから目と耳を離せません。

●東京都世田谷区 Mさん

私の知る限り、阪田さんは2017～21年の5年間に約160公演で合計約800曲を演奏しているんです。エチュードや組曲等を全曲弾いた時は1曲としてカウントしての驚異的な数字です。作曲家も時代や国を問わず多岐に渡り、ピアノ協奏曲や室内楽も数多く手掛け、20代でこの経験の豊富さは比類が無いことです。

演奏活動だけでなく取材や収録、執筆も数多くこなし、指揮者としてのデビューも果たし、先日は初の編曲集を出版しました。阪田さんは決して弱音を吐かず、言い訳もせず、恐ろしいほどのプロ意識を持ち、何一つ手を抜くことがありません。心身共に健康で、これからもずっとずっと崇高な存在でいてね、と心から願っています。

●神奈川県横浜市 Mさん

阪田知樹さんの魅力は、一言では語り尽くせません。一度生音を聴いたら、こんなピアノが存在するんだ！と感動と驚きで虜になりました。

同じピアノから奏でられているとは思えないその多彩な音色、響き、どれをとつても心にグッときます。演奏と共に会場でその音楽の緊張と癒し、美しさを味わっているかのような一体感。まるでフレンチのフルコースを堪能しているかのような満足感。演奏会後は幸福に包まれ、うっとり。そしてまた次の演奏会が早く来ないかと待ちきれなくなります。その演奏は、音楽への愛と知識の深さに裏打ちされ、話し始めると止まらないこともしばしば。そして所作も美しい。

最近では、指揮デビュー、編曲集出版、作曲作品の世界初演、と活動の幅を拡げているつしやいます。ますますこれからが楽しみな若き巨匠、阪田知樹さんです。

「阪田知樹ピアノリサイタルシリーズ」
公演リーフ(2022年8月号)
編集・発行 大阪新音